



Index

ちょっとQ&A

いつまでも元気なからだで過ごすために	1
研究進行管理報告会の実施	3
日本老年医学会 優秀論文賞受賞	3
トピックス	
長寿・生活習慣病研究と長距離選手の遺伝子	4
平成19年度 科学費補助金の採択状況	6
公開講座 今後の予定	8
主なマスコミ報道	8
日本基礎老化学会第30回大会開催される	8



研究進行管理報告会
本間研究部長(左)、宇良研究員(右) (p.3)

いつまでも元気なからだで過ごすために

—高齢期の転倒予防について—

ちょっとQ&A

自立促進と介護予防研究チーム 研究副部長 金 憲経

さる3月14日、「長年にわたり地域虚弱高齢者の転倒及び尿失禁を予防するために精力的に調査及び研究を行い、科学的根拠に基づいた対策を開発し、都民に広く普及させた」ことを評価され、東京都福祉保健局長賞を受賞しました。これにちなみ、高齢者にとって大きな問題の一つである「転倒」とその予防を中心にお話ししたいと思います。

高齢期には、病気とは言い切れない生活機能低下、転倒、低栄養、閉じこもり、認知機能の低下、口腔機能低下など「老年症候群」と呼ばれる徴候が増えます。これらの症状は、生活機能の自立や生活の質を阻害するだけでなく、要介護状態となる主な原因なのです。いつまでも元気なからだで過ごすためには、この老年症候群をいかに予防するのが重要なポイントです。

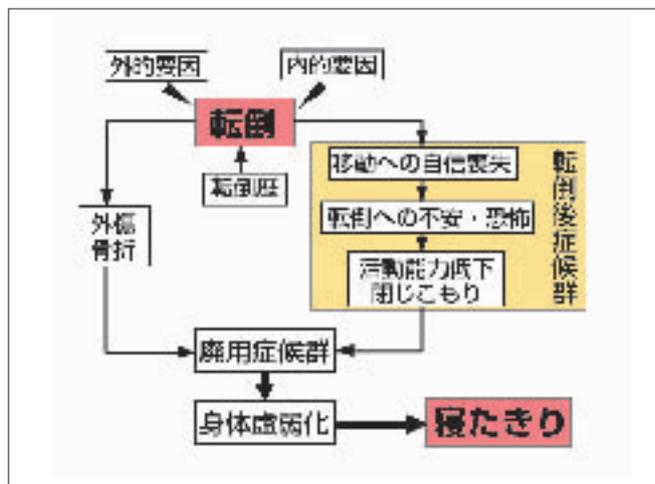
ることも稀ではありません。幸い骨折までは至らなくても、転倒を経験することにより、歩いたり外出したりする際の自信感を失う**転倒後症候群** (post fall syndrome) が生ずることは、転倒が持つもう1つの問題となります。転倒恐怖感のために活動が制限されると、筋力の虚弱化が加速され、生活機能障害の引き金となってしまいます (図1)。

図1 転倒に起因する寝たきり



1. なぜ転倒が問題なのでしょう?

A: 「自分の意志からではなく、地面またはより低い場所に、膝や手などが接触すること」と定義される転倒は、高齢者の生活機能の自立や生活の質を阻害する大きな要因です。日本の高齢者は、1年間で約10~20%が転倒し、そのうちの約10%が骨折に至ると報告されています。高齢者の大腿骨頸部骨折の原因の80%以上は転倒で、機能回復には長期間の入院治療が必要となり、身体機能の低下が加速されてしまいます。そのため、歩行困難や杖歩行を余儀なくされ、活動範囲が一段と制限されます。場合によっては、脳血管障害、認知症や高血圧などの合併症につな



2. 転倒と強く関連する要因は？

A：転倒の原因あるいは危険因子はさまざま複雑です。それは、老化や老年病、さらには物的環境など、多種多様の要因が相互に関連しているからなのです。

転倒をもたらす危険因子は、まず身体的要因を主とする内的要因と生活環境要因を主とする外的要因、そして転倒の既往の2つに大きく分けられます。転倒の危険因子を総合的にまとめた先行研究によれば(表1)、転倒の相対的な危険度(RR)は、筋力の低下(RR=4.4)、転倒歴(RR=3.0)、歩行障害(RR=2.9)、バランス障害(RR=2.9)、歩行障害(RR=2.9)、バランス障害(RR=2.9)が高く、他に視力障害、関節炎、認知機能障害、年齢80歳以上などの因子がこれに続きます。これらの危険因子は、改善不可能な要因、改善に時間を要する要因、改善可能性が高い要因、の3つに分類できます。

表1 先行研究で検討されている転倒の危険因子

危険因子	相対的危険度
筋力の虚弱	4.4
転倒歴	3.0
歩行障害	2.9
バランス障害	2.9
補助器具の使用	2.6
視力障害	2.5
関節炎	2.4
ADL障害	2.3
うつ病	2.2
認知機能障害	1.8
年齢80歳以上	1.7

歩行障害(RR=2.9)、バランス障害(RR=2.9)が高く、他に視力障害、関節炎、認知機能障害、年齢80歳以上などの因子がこれに続きます。これらの危険因子は、改善不可能な要因、改善に時間を要する要因、改善可能性が高い要因、の3つに分類できます。

3. 転倒を予防するための有効な対策とは？

A：転倒は転倒関連危険因子の数と深く関連し、転倒率は危険因子の数とほぼ直線的に増加することが先行研究で明らかになっています。したがって、危険因子を1つ減らすと転倒の頻度や転倒後遺症に及ぼす影響がぐっと小さくなることが予想されます。

転倒を予防するためには、多くの内的要因のうちの可変的要因、および外的要因に当てはまる因子を改善する方法しかありません。改善可能な危険因子としては、視力障害、薬物服用、身体機能の低下、家屋内外の物的環境の整備などが挙げられます。中でも、身体機能に関連した要因は、トレーニングや普段からの訓練によって低下を予防し、機能の強化が可能です。すなわち、身体機能は可変的な要因であることに重要な意味があります。

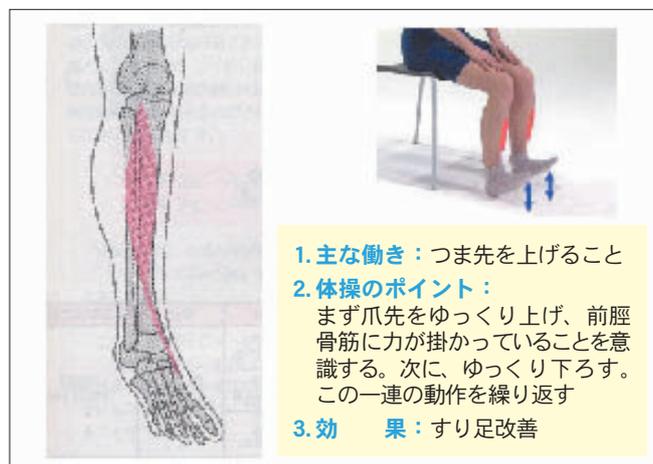
4. 転倒を効果的に予防するためにはからだのどの部位の強化が必要なのか

A：転倒の発生について調べた調査によれば、転倒の60%は歩行中に発生し、主な理由はつまずいた40%、滑った30%です。「高齢者は何故つまずきやすくなっているの

か」に対する答えが、転倒予防運動の1つのポイントとなります。

つまずき、即ち「すり足」の原因は、歩くときつま先を上げる役割を担っている「前脛骨筋」が弱くなっていることです。転倒を予防するためには、まず前脛骨筋の筋力強化が必要です(図2)。次に、歩行機能と強く関わっている太股の大腿四頭筋、歩くときに使用する付け根の腸腰筋、足を蹴り出す時に使用する下腿三頭筋の強化が必須です。

図2 前脛骨筋を鍛える体操の実際

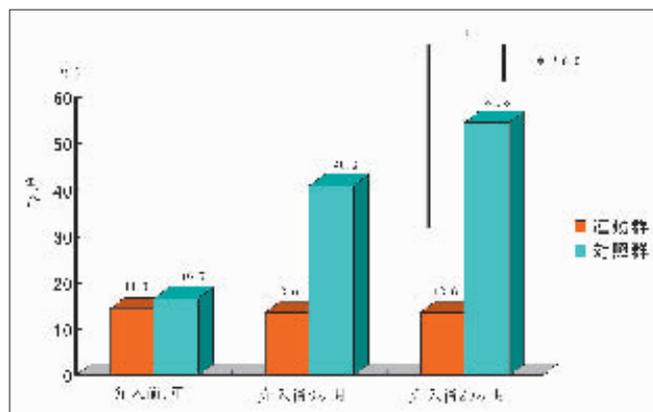


5. 運動の効果の実例は？

A：私たちが介入研究の一環として行った転倒予防のための運動指導の中から得られた結果をいくつかご紹介します。

1) 転倒関連意識の変化：転倒予防を目的とした運動を続けることによって、からだは柔らかくなり、足の筋力や歩行が安定するなど、主観的体力の変化が顕著です。また、転倒予防運動参加者の61%が「自分自身で転倒を予防できるとの自信がついてきた」という意識の変化があり、同時に転倒恐怖感が顕著に低下する傾向が見られ、転倒予防

図3 転倒率の推移



を目指す運動の効果は大きいといえます。

2) 体力の変化：転倒予防運動によって、転倒の危険因子であるバランス能力の改善、筋力の増加、歩行機能の改善が観察されています。

3) 転倒率の変化：運動開始前1年間の転倒率は、対照群（運動をしない群）16.7%、運動群14.3%と、両群間で同じような割合でした。期間終了後、第1回目の追跡期間中（8ヶ月間）に発生した転倒率は対照群40.9%、運動群13.6%、またその後20ヶ月間の累積転倒率は、対照群54.5%、介入群13.6%と、運動群の転倒率が顕著に低い値を示しました（図3）。転倒予防を目的とした運動を続けることによって、運動期間中に改善される転倒関連意識や

身体機能の向上は、その後の転倒率の抑制につながることが証明されています。

このように、衰えた身体機能も訓練によって改善することが出来るのですから、足が弱くなったなどと言って家に引きこもっている必要はありません。逆に転倒の不安のある方や、歩行に何らかの不都合を感じている高齢者の方は、自治体等で開催している転倒予防教室などに積極的に参加なさってみてはいかがでしょうか。

運動機能の向上が、生活機能の自立や生活の質を向上させ、要介護状態となることを遅らせて、いつまでも元気なからだで過ごすことに繋がるのです。

研究進行管理報告会の実施

平成19年5月28、29日の両日に、「研究進行管理報告会」が開かれました。

この報告会は、平成17年度より、研究の一層の推進を図ることを目的とし、所長に対して、年2回（上半期・下半期）、各研究チームのチームリーダーが研究の進行状況を報告し、その報告に基づき、所長より進捗状況の確認と調整を行うものです。

実施状況

- 社会科学系・長期プロジェクト等
平成19年5月28日（月）午後1時から4時10分まで
- 自然科学系・研究支援施設等
平成19年5月29日（火）午後1時から4時30分まで
- 出席者
所長、両副所長、理事長、事務局長、研究調整部長、事務局



左から井藤所長、石井診療所長、石渡研究副部長

日本老年医学会 優秀論文賞受賞



福祉と生活ケア研究チーム 研究部長 **高橋 龍太郎**

平成19年6月21日札幌市において行われた第49回日本老年医学会学術集会で、「地域在住要介護高齢者の低栄養リスクに関する要因について」と題する論文が日本老年医学会優秀論文賞を受賞しました。虚弱・要介護高齢者の栄養状態を簡便な評価法で測定し、うつ状態や健康度などの主観的健康状態が低栄養の強いリスクになっていることを明らかにし、要介護状態の悪化予防対策に寄与するものとして評価されました。



自立促進と介護予防研究チーム 主任研究員 **岩佐 一**

平成19年6月21日第49回日本老年医学会総会（札幌）にて、論文「地域在宅高齢者における認知機能の縦断変化の関連要因：要介護予防のための包括的健診（「お達者健診」）についての研究」が優秀論文賞を受賞しました。地域高齢者における認知機能の加齢変化の特徴ならびにその関連要因について明らかにし、認知機能の低下の予防やその支援策について貢献する可能性が評価されました。今回の受賞を励みにして、いっそう研究活動に精進してゆきたいと思います。

長寿・生活習慣病研究と長距離選手の遺伝子

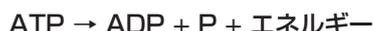
トピックス

健康長寿ゲノム探索研究チーム 主任研究員 福 典之

超エリート長距離選手のミトコンドリアDNAはどのような特徴を持っているのでしょうか？肥満・糖尿病患者と長距離選手、両者の身体的特性は相反しますが、ミトコンドリアDNAには意外にも似通った特徴を持つ可能性があります。私たちの研究チームでは、百寿者や生活習慣病患者だけでなく、長距離選手のミトコンドリアDNAも研究対象としておりますので、今回は長距離選手のミトコンドリアの特徴について紹介したいと思います。

筋収縮のための直接のエネルギー源ATP

私達が、ベッドから起き上がったり、外を散歩したりと、何か行動をするときは筋肉を動かします。正確に言うと、筋を収縮・弛緩させるわけです。この筋収縮にはアデノシン三リン酸(ATP)という物質が不可欠です。ATPをアデノシン二リン酸(ADP)とリン酸(P)に分解する過程で生じるエネルギーを使って筋収縮を引き起こします。心臓の筋肉を動かすエネルギー源もATPです。



したがって、ATPがなければ人は生きていくことができません。残念ながら人の体内にはATPは少ししかありませんので、再合成しないと無くなってしまいます。



ATPを再合成するための機構はいくつかありますが、主に食事から摂取した炭水化物や脂質と肺から取り入れた酸素を用います。ではATPは細胞のどこで再合成されているのでしょうか？そのほとんどは細胞内小器官であるミトコンドリア(図1)で行われます。

ミトコンドリア

ミトコンドリアはエネルギー産生工場です。この他にも多様な仕事をミトコンドリアは担っていますが、その主要

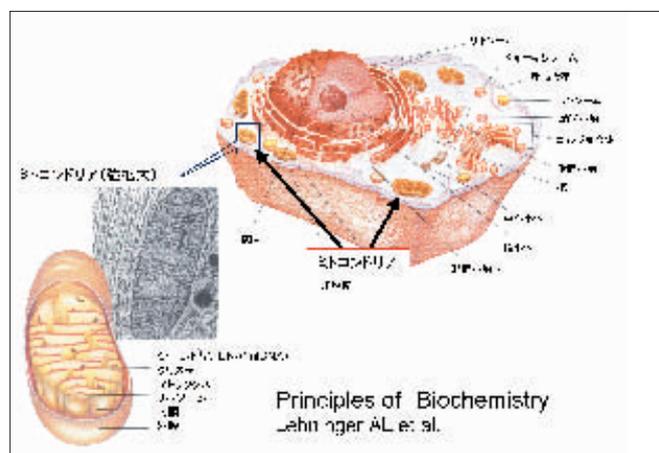


図1. 動物の細胞とミトコンドリア

な役割はやはりATPの生成です。ミトコンドリア内に存在するクエン酸回路で栄養素に含まれている水素を取り出し、内膜にある電子伝達系で水素イオンの濃度勾配を生じさせ、ATP合成酵素はミトコンドリア内膜の内外における水素イオン濃度の落差を利用して、ATPを合成します。ちょうど水力発電所がダムに貯えられた水の位置エネルギーを電気エネルギーに変換しているのに似ています。ロケットは水素と酸素を反応させたときの爆発的なエネルギーを使って宇宙空間へ移動しますが、ミトコンドリアにおいても水素と酸素を反応させてATPを生成します(図2)。

このミトコンドリアは、核とは別に独自のDNA(遺伝情報)、すなわちミトコンドリアDNAを有しています(図1)。ミトコンドリアDNAは16,000塩基程度の非常に小さいDNAですが、電子伝達系の主要な部位の遺伝情報を持っていますので機能的にはとても重要です。“母親”からしか遺伝しないという特徴も持ちます。ミトコンドリアDNAは人種間・個体間で非常に多様性に富んでおり、日本人同士を比較しても異なった塩基配列をしています。異なった配列をしているということは、それから異なった蛋白質を作り出していることを意味します。

ミトコンドリアと生活習慣病・長寿

ミトコンドリアDNAの塩基配列のわずかな違い(=遺伝子多型)は、ミトコンドリア蛋白質に相違をもたらし、ひいてはミトコンドリアでのATP産生能力にも違いを生じさせます。肥満、2型糖尿病、メタボリックシンドロームは代謝性疾患ですから、ミトコンドリアDNAの塩基配列の違いがそれらの疾患への罹りやすさと関連している可能性があります。

“儉約遺伝子”という概念がありますが、これは生体のエネルギー効率が高いと、過食によりエネルギーを過剰に蓄えてしまい、肥満や糖尿病に罹りやすくなる遺伝子を示します。車に例えると、燃費がいいので(エネルギー効率が高い)なかなかガソリン(脂肪や炭水化物)が減らない状態です。私達は最近、糖尿病やメタボリックシンドロームに罹りやすいミトコンドリアDNA多型を同定しましたが、これはミトコンドリアにおけるエネルギー効率を高める遺伝子多型かもしれません。一方、96名の百歳以上の人(百寿者)の解析によって、長寿に関連するミトコンドリア遺伝子多型も見いだしています。このDNA多型は、ミトコンドリアが浪費型に変化し、肥満や糖尿病・メタボリックシンドロームに罹りにくいために、結果として長寿に関連しているかもしれません。

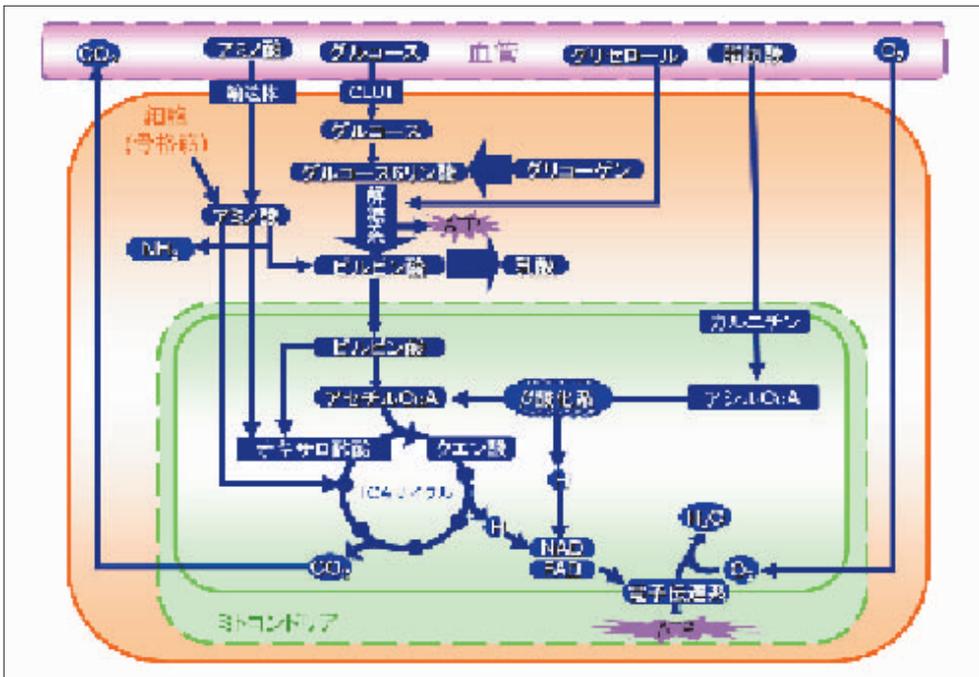


図2. 三大栄養素のエネルギー代謝

ドリアドNA多型は、私たちが解析した若年肥満者および2型糖尿病患者でも高頻度に認められました。この多型は、ミトコンドリアのエネルギー効率を高めるので、不活発な生活をしていると肥満や糖尿病になり、逆にトレーニングを積むとマラソン適性を示す可能性があります。ではマラソン適性を持つミトコンドリアDNA多型を有する人は長寿になりづらいのでしょうか？今後の検討課題です。

日本人長距離ランナーとミトコンドリア

マラソンは、休み無く2時間以上も継続的に筋収縮をしなければなりません。そのために、ミトコンドリアにおいて、脂質や糖質に含まれている水素を利用し、それを酸素に受け渡すことでATPを休み無く産生します(図3)。いかに効率的にミトコンドリアにおいてATPを生成するかが勝敗をわけているわけです。私たちは、このエネルギー産生効率の差異にミトコンドリア遺伝子が関与していると考え、数十名の日本人一流長距離選手のミトコンドリア遺伝子のDNA配列を調べました。その結果、マラソン選手において、ミトコンドリアDNAの8794番目の塩基シトシン(C)がチミン(T)に変わっている頻度が高いことを見いだしました。この多型はATP合成酵素の一部のアミノ酸を変化させますので、ミトコンドリアにおけるATPの産生能力に何らかの変化を生じさせていると考えられます。残念ながら、まだそのメカニズムを解明するには至っておりません。興味深いことに、マラソン適性を示すある種のミトコン



図3. マラソン競技のATP生成の特徴

アフリカ人長距離ランナーとミトコンドリア

箱根駅伝に登場する“助っ人”はほとんどがアフリカ人です。また、アフリカ人はオリンピックでも非常に優れた成績を残しています。アフリカ人はスーパーなミトコンドリアを有しているのでしょうか？私たちは、イギリスグラスゴー大学のピッツィラディス教授と共同で、オリンピック優勝者を含むアフリカ人超エリート長距離ランナーのミトコンドリアDNAを分析するプロジェクトを行っています(図4)。その中で、長距離選手ではある特定のミトコンドリアDNA多型が高頻度に認められました。アフリカ人と日本人のミトコンドリアDNA配列は非常に異なりますが、今後の研究で、アフリカ人と日本人のエリートランナーに共通する特徴的な多型を見いだせる可能性があります。

生活習慣病などの疾患感受性遺伝子探索の研究が世界中で注目を集めていますが、私達は長距離ランナーのミトコンドリアDNAも解析することで、ミトコンドリア機能の相違を捉え、長距離選手の遺伝子の研究のみにとどまらず、長寿遺伝子の解明にも寄与できると考え、研究を進めているところです。



図4. ケニア人長距離ランナーのトレーニング風景
グラスゴー大学スコット博士より提供

平成19年度 科研費補助金の採択状況

研究種目	新規	氏名	所属研究チーム	研究課題	交付決定額 単位(円)
特定領域		村山 繁雄	老年病のゲノム解析	高齢者タウオパチーの臨床分子病理学的研究	3,900,000
基盤B		青崎 敏彦	老化ゲノム機能	線条体機能モジュールの動作原理の解明と視床入力役割	3,600,000 1,080,000
		田久保 海誉	老年病のゲノム解析	新たに開発した定量的FISH法による早老症、老化・がん化におけるテロメア代謝	2,800,000 840,000
		新開 省二	社会参加とヘルスポモーション	地域高齢者の「虚弱(frailty)」の特徴、成因および予防法の解明	4,800,000 1,440,000
		村山 繁雄	老年病のゲノム解析	加齢に伴う翻訳後異常修飾蛋白蓄積の相互作用に関する臨床・実験神経病理学的研究	3,600,000 1,080,000
		高橋 龍太郎	福祉と生活ケア	介護関係の形成と転機：在宅介護の構造と変動要因に関する縦断研究	9,100,000 2,730,000
	☆	青柳 幸利	健康長寿ゲノム探索	高齢者の健康に及ぼす入塩基性タンパク質と日常身体活動の相互作用：7年間の縦断研究	7,000,000 2,100,000
	☆	金 憲経	自立促進と介護予防	老年症候群の複数徴候保持者の徴候改善を目指す包括的介護予防プログラムの効果検証	4,800,000 1,440,000
	☆	宮坂 京子	老年病のゲノム解析	際外分泌機能の修復と再生を目指した研究	6,000,000 1,800,000
基盤C		藤原 佳典	社会参加とヘルスポモーション	地域在宅高齢者における認知機能低下を予測する生理的・生化学的マーカーの開発	1,200,000 360,000
		杉原 陽子	福祉と生活ケア	都市における高齢者の心理的・社会的孤立に関する質的研究：支援策への示唆	2,298,950 689,685
		岩下 淑子	老化ゲノム機能	T細胞活性化に関わる脂質ラフトの分子基盤の解析	1,300,000 390,000
		西垣 裕	健康長寿ゲノム探索	加齢に伴うミトコンドリアゲノムの量的減少の分子基盤	1,000,000 300,000
		仲村 賢一	老年病のゲノム解析	FISH法によるウェルナー症候群患者の生体内・各染色体別テロメア代謝の解析	1,400,000 420,000
		石神 昭人	老化ゲノムバイオマーカー	アルツハイマー病発症機序の解明	1,000,000 300,000
		大竹 登志子	福祉と生活ケア	高齢者の排泄ケアプログラムの研究開発と効果測定	1,200,000 360,000
	☆	内田 洋子	老年病のゲノム解析	アルツハイマー病における神経再生機構の解明とその治療への応用	2,600,000 780,000
	☆	菊地 和則	福祉と生活ケア	ケアマネージメントのためのチームマップ開発に関する研究	1,500,000 450,000
	☆	権藤 恭之	福祉と生活ケア	超高齢期の心理適応モデルとしての老年的超越の解明と測定尺度の開発	1,200,000 360,000
	☆	河合 千恵子	福祉と生活ケア	虚弱高齢者の心の支援としてのライフストーリーブックを作成する介入プログラム	1,800,000 540,000
	☆	伊集院 睦雄	自立促進と介護予防	「読み」の発達性障害に関する認知神経心理学的研究：実験的・モデル論的アプローチ	1,800,000 540,000
	☆	半田 節子	老化ゲノムバイオマーカー	ビタミンC不足が老化や神経系、エネルギー代謝、脂質代謝に及ぼす影響	2,700,000 810,000
	☆	田中 康一	老化ゲノム機能	カルニチンによる虚血性脳障害に対する神経細胞と神経機能改善に関する研究	2,300,000 690,000
	☆	本田 陽子	健康長寿ゲノム探索	宇宙環境と線虫を用いた老化制御遺伝子の探索	1,900,000 570,000
	☆	久保 幸穂	老化ゲノムバイオマーカー	重症筋無力症の原因究明と人体病理学的解釈	2,600,000 780,000
	☆	泉山 七生貴	老年病のゲノム解析	独自に開発したFISHテロメア長測定法による膀胱癌を用いた悪性化の進展過程の解明	2,100,000 630,000
	☆	本間 尚子	老年病のゲノム解析	老年病と性ステロイドホルモンの関係についての研究	2,300,000 690,000
	☆	沢辺 元司	老年病のゲノム解析(兼)	病理解剖症例を用いた粥状動脈硬化症と炎症性サイトカイン遺伝子多型の関連解析	2,200,000 660,000
	☆	吉田 裕人	社会参加とヘルスポモーション	高齢保健・介護予防事業の医療費・介護費抑制効果に関する実証研究	2,200,000 660,000

平成19年6月15日現在

研究種目	新規	氏名	所属研究チーム	研究課題	交付決定額 単位(円)
	☆	島田 信子	老化ゲノムバイオマーカー	ビタミンC不足マウスを用いた慢性閉塞性肺疾患(COPD)発症機構の解明	2,600,000 780,000
	☆	齊藤 祐子	老年病のゲノム解析(兼)	純粋レヴィー小体病の認知障害に関する、動的神経病理学的研究	1,800,000 540,000
	☆	宮崎 剛	社会参加とヘルスプロモーション(兼)	成熟破骨細胞の骨吸収機能制御に関する分子疫学的研究	2,100,000 630,000
萌芽		新海 正	老化ゲノムバイオマーカー	ダイオキシンが老齡ラットの行動・記憶・学習におよぼす影響についての研究	600,000
		田久保 海誉	老年病のゲノム解析	FISH法によるサブテロメア欠失とダウン症候群を含む知的障害との関連の解明	1,300,000
		石川 直	老年病のゲノム解析	ウエルナーヘリカーゼのもつ抗老化・抗がん化作用の分子基盤の探索	1,500,000
		丸山 直記	副所長	臓器障害におけるシトルリン化分子の網羅的同定と応用	1,300,000
		宮坂 京子	老年病のゲノム解析	ラス遺伝子変異に伴って増加する新規蛋白を標的とした膜外分泌再生のための基礎研究	1,300,000
	☆	高橋 龍太郎	福祉と生活ケア	日米戦争被害者のライフストーリーを用いた教材開発に関する研究	1,400,000
	☆	遠藤 玉夫	老化ゲノム機能	超百寿者の機能グライコミクス解析による老化バイオマーカーの開発と応用	2,000,000
	☆	石井 章雄	老年病のゲノム解析	新たに開発した定量的FISH法によるテロメア長と染色体の不安定性の関連の証明	1,800,000
若手B		福 典之	健康長寿ゲノム探索	運動トレーニングによる生活習慣病予防効果を規定するミトコンドリア遺伝子多型の探索	1,700,000
		權 珍嬉	自立促進と介護予防	地域虚弱高齢者の筋肉減少症予防を目的とした栄養・運動の総合的な支援システムの構築	1,600,000
		呉田 陽一	福祉と生活ケア	音声・音韻的符号化の容易性と使用頻度の影響に関する実験心理学的研究	1,500,000
		萬谷 博	老化ゲノム機能	Klotho蛋白質の発現低下によるカルパインの異常活性化機構の解明	1,200,000
		高橋 正時	老化ゲノムバイオマーカー	内示発生におけるSIX1遺伝子とSLC26A4遺伝子の相互作用	1,500,000
		鈴木 幸久	自立促進と介護予防	原発性眼瞼痙攣患者の脳内中枢性ベンゾジアゼピン受容体密度	500,000
		秋本 紗恵子	老年病のゲノム解析	加齢に伴う摂食調整変化と摂食調節ペプチド(グレリン、オレキシン、CCK)の関与	1,300,000
		本庄 恵	老化ゲノムバイオマーカー(兼)	房水流出路の制御による緑内障の病態解明	700,000
	☆	寛 佐織	介護予防緊急対策室	加圧トレーニングの分子機構の解明による高齢期における安全なトレーニング方法の開発	2,200,000
	☆	萬谷 啓子	老化ゲノム機能	筋ジストロフィー症の発症に関わる糖鎖合成酵素の機能解析とその破綻	1,300,000
	☆	岩佐 一	自立促進と介護予防	超高齢者における精神機能の経年変化の把握及びその予測因子の探索に関する追跡調査	2,000,000
	☆	塚原 美穂子	ポジトロン医学研究施設	アルコール依存症とその関連脳症における活性化マイクログリアの画像化	1,400,000
	☆	木村 百合香	老化ゲノムバイオマーカー(兼)	老人性難聴の分子病理学的解析～蝸牛外側組織に焦点を当てて～	1,300,000
	☆	伊東 美緒	福祉と生活ケア	認知症高齢者への「寄り道散歩」プログラム導入効果に関する研究	1,800,000
	特別研究員	☆	島田 裕之	自立促進と介護予防	PETを用いた高齢者運動至適強度の検討と転倒予防プログラムの無作為化比較試験
☆		村上 一馬	老化ゲノムバイオマーカー	βアミロイドの病的コンホメーションを標的としたアルツハイマー病治療薬の設計	2,800,000
研究成果 公開促進費	☆	田久保 海誉	老年病のゲノム解析	学術図書：Pathology of the Esophagus	1,000,000

★平成19年度科学研究費補助金新規採択分において、東京都老人総合研究所(東京都高齢者研究・福祉振興財団)は第13位でした。(応募件数が50件以上の研究機関を分析対象)

計 57名 150,238,635
直接経費 124,798,950
間接経費 25,439,685

老年学公開講座 今後の予定

入場無料
先着順

手話通訳を同時に行います。事前申込みは不要です。

第92回 「介護予防

～健康長寿の第一歩～

日時：平成19年9月5日(水) 午後 1:00～4:30

場所：北とぴあ さくらホール

- JR京浜東北線 王子駅北口下車 徒歩2分
- 東京メトロ南北線 王子駅(5番出口)徒歩2分
- 都電荒川線 王子駅前下車 徒歩2分
(北区王子1-11-1)

定員：1300名(先着順)

第93回 予定テーマ

「からだもこころも健康長寿
—社会参加のすすめ—

日時：平成19年10月15日(月) 午後1:00～4:00

場所：タワーホール船堀

- 都営新宿線 船堀駅下車 徒歩1分
(東京都江戸川区船堀4-1-1)

定員：750名(先着順)

主なマスコミ報道

H.19.3.～H.19.6.

老化ゲノム機能研究チーム 野本茂樹

- 「JSTバーチャル科学館 恐竜たちの地球 恐竜の進化7の謎」
(H.19.3.26インターネットに公開、科学技術振興機構
<http://jvsc.jst.go.jp/>)
- 「四季(コラム) 高齢者の熱中症対策」
(日本農業新聞 H.19.4.26)
- 日本経済新聞 タ & Eye 「高齢者の熱中症対策」
H.19.6.5夕刊

老化ゲノムバイオマーカー研究チーム 研究部長 白澤 卓二

- 「アンチエイジングな食事 豚肉・鶏肉・牛肉」
(暮しと健康 H.19.5.1発行5月号)
- 「BS特集 未来への提言」(NHKBS H.19.4.30)
- 「最先端の科学技術が可能にする近未来」
(ニュートン別冊 からだと病気 H.19.5.10発行)
- 「アンチエイジングな食事 にんにく・ねぎ・しょうが」
(暮しと健康 6月号)

自立促進と介護予防研究チーム 研究部長 本間昭

- 「認知症と運転」(NHKBS海外向けニュース H.19.5.13)

福祉と生活ケア研究チーム 研究部長 高橋龍太郎

- 「家庭内事故を防ぐ」(テレビ関西 痛快!エブリデイ H.19.5.15)

附属診療所 所長 石井賢二

- 「TOKYOほっと情報～ポジトロンCTとは何か～」
(テレビ東京 H.19.5.4)
- 「アルツハイマー病治療のいま」(シルバー新報 H.19.6.1号)

介護予防緊急対策室 室長 大淵修一

- 「50歳から始める介護予防プログラム」(在宅介護支援雑誌
「ほっとくる」平成19年8月号 H.19.6.16発行)
- 「“はつらつライフ”を目指して 無理なく自宅で続けられる
介護予防」(福祉住環境コーディネーター協会広報誌「FJC」
第14号 H.19.6.25発行)

日本基礎老化学会 第30回大会開催される

さる6月20日(水)～22日(金)、札幌市で日本基礎老化学会第30回大会が開催され、老人総合研究所の丸山直記副所長が大会会長を務めました。今年は第25回日本老年学会総会(老化関連6学会で構成)との合同開催で、基礎老化学会の一般演題は65題にのぼり、老人研からも多数の発表者・参加者がいました。丸山副所長のほか西垣研究副部長、石神主任研究員、新海研究員らが口頭発表の座長を務めるなど、基礎老化学会の創立母体である老人総合研究所の貢献が、随所に見られました。

退職

平成19年5月31日付 老化ゲノムバイオマーカー研究チーム 研究部長 白澤 卓二

編 後 集 記

気象庁は、6月11日に異常気象をもたらす「ラニーニャ現象」が発生し、秋まで続くと発表をしました。太平洋高気圧の勢力が強まり、今年の夏は猛暑の可能性が高いと…。夏に発生するのは99年以来。老人研NEWS 5月号で紹介された科学技術週間参加行事講演会「高齢者を襲う熱中症～この夏をのりきるヒント～」の予防策のひとつである、『適切な室温設定を心がける』を省エネ対策とともに実践してうちわを片手にがんばっています。
(ペーパーメント)



平成19年7月発行

編集・発行：(財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 東京都老人総合研究所 広報委員会内「老人研NEWS」編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241 (内線3151) Fax. 03-3579-4776

印刷：コロニー印刷

ホームページアドレス：<http://www.tmig.or.jp>

無断複写・転載を禁ずる

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています